

# 新春放談

## —眼科のあたらしい潮流—

日野病院名誉病院長 玉井 嗣彦



いまほど健康に関心が集まっている時代はないと思われませんが「目に見える人間は、見えるという幸福を知らずにいる」というフランスの経済学者ジイドの言葉どおり、目に関しては無関心な人が多すぎるようです。おそらく、生命にかかわるケースが少ないからでありましょう。しかし、「もし失明したら」ということを想像しますと、“見えることの幸福”がわかるのではないのでしょうか。

失明予防協会の40歳以上を対象とした全国調査によりますと、熟年者の30人に1人は緑内障の可能性があると指摘しています。老視を自覚した時点において、眼圧、眼底、視野などの精密検査を受け、不幸にして発見されても、適切な処置を受ければ失明という悲劇を招かなくてもすむ段階まで医学は進歩していますので、自ら検診を受ける姿勢が大切です。

糖尿病網膜症のために失明する患者が増加しています。早期発見・早期治療の機会を失っている人に多くみられますので、糖尿病と診断されたら、眼科医との連携のもとに内科的治療を受け、必要なときには光凝固術や抗血管内皮増殖因子（vascular endothelial growth factor:VEGF）製剤の眼球内投与などの適切な処置を眼科で受けなければなりません。

抗VEGF製剤は、上部疾患での視力に関与する網膜黄斑部の浮腫の改善のみならず、これまで治療困難であったさまざまな眼底疾患、すなわち滲出型加齢黄斑変性、網膜静脈閉塞症、近視性脈絡膜新生血管などの疾患に用いられ、良好な治療成績を上げています。

血管新生に関する研究とVEGFの発見は、今年も眼科のあたらしい潮流として、その姿を変えることはありませんが、未熟児網膜症に対する適応時期・薬物の種類と投与量などはまだ確立されておらず、緊急の課題となっています。

一方、これらの疾患のみならず、眼部のさまざまな腫瘍性疾患、炎症性疾患の病態にもVEGFが関与することが示され、抗VEGF薬の局所投与が試みられています。成果を期待したいものです。

高齢化社会を反映して、白内障患者も増加しています。眼内レンズ移植術の普及により、術後快適な矯正視力が得られますので、積極的に人生を生きようとする人々に歓迎されています。健やかな老後を目指して、40歳からの目の健康に気をつけていただきたいものです。

「健康長寿を目指して一納豆食の効用」は過去にも本紙上で、網膜血管閉塞症の自験例を対象に報告しましたが、昨年8月13日（日）にテレビ放送された「名医の太鼓判」（TBS系列、全国放送）の中では、ネバネバを気にする人に配慮して、食べ方としては今回納豆に酢を加えた「酢納豆」の効用を当院でのインタビューをかねて報告しました。酢には血液をサラサラにして血行を促進させる効果があるので、血栓の予防・改善にはまさに最適です。納豆に入れる醤油も少なく済むので、減塩が望め高血圧の人にも最適でした。

放送直後より、全国各地から治療方法に関する問い合わせがあり、その返事に大童ですが、現在治療中で効果が不十分な患者さんには、全ての診療科に通じる問題ですが、いま受けている治療を否定するようなコメントや第三者を紹介するような行為は専門医といえども、かかりつけ医からのご要望がない限り、容易でないと感じています。